Sylvia's Lovers
ー追いつめられる女ー

鈴　江　璋　子

1

エリザベス・ギャスケルの長篇第5作*Sylvia's Lovers* (1863) は、この後の長篇*Wives and Daughters*執筆中に作者が急逝する、という事情から、完成作としては、ギャスケル最後の作品になる。作家53才、創作技術も、人生に対するまなざしも深まった時期の作品である。

しかし『シルヴィアの恋人たち』とは、今日の読者を一瞬戸惑わせるタイトルである。boyfriend, date, steady, partnerなどの言葉が普通用いられる今日、loverという響きは、かなり重い。複数の情夫？という疑問が一瞬頭をよぎる。属格でなくて対格、すなわち“シルヴィアを愛した人たち”の意味か、とも考えられる[1]。しかし作中、シルヴィアがフィリップを見つけて“there was her lover and affianced husband”[2]と思う箇所、彼にチャーリー・キンレイドは生きているのではないか、と訊ねる箇所で“It was the first time she had named the name of her former lover to her present one since the day ...”[3] (下線筆者)、という表現が用いられていることを考える時、やや古風な“lover and lass”という感覚で、この語がごく普通に“恋人”として、属格に用いられていることが理解される。

それでは作者ギャスケルは、この作品を題名通り、シルヴィアの恋人たちの数奇な運命を辿る物語にしたかったのだろうか。確かに海軍強制徴募隊によって恋を引き裂かれた若者の悲劇がある。不正直な手段に訴えてまで手に入れた思い妻に、愛されなかった青年の悲劇がある。作者自身にも、「忍ぶ恋」のモチーフに引摺られすぎたアンバランスが見られる。

しかし現在、私はこの物語を“シルヴィアの物語”として読みたいと思う。すなわち溢れるような情熱と正義感と行動力を備えながら、それを発揮すべき道を塞がれ、追いつめられて、石になってしまった女の悲劇として、であ

る。しかも彼女には何度か選択のチャンスがあった。父母を捨てて恋を取るかという選択、嬰児や夫を捨てて恋人を取るかという選択である。そして彼女は、余儀なくされたとはいえ、常に良識的な方を——すなわち間違った道を——選んでしまう。

『嵐が丘』のキャサリン・アーンショウ同様、シルヴィアは選ぶべき男を誤ったla traviataである。しかも、その後の恋人たちの、一方は少々愚かしい、他方は少々調子の良すぎる冒険を思う時、シルヴィアには不毛の選択しかなかったのではないかという疑念が頭をもたげる。そこにロマンティストではないギャスケルの、したたかさがあるのだろう。

最後の選択の機会に、初めて彼女は自分自身の理念を貫く。誓を守る、という形を取って、彼女は安易な、"良識的"な妥協を拒む。すなわち彼女は自分に道を誤らせた男を許そうとはしないのである。ストーリーは涙と愛と赦しの大団円では終らず、普通の読者の期待を裏切るアンチクライマックスで終る。

それは当然ながら作者エリザベス・ギャスケルの選択である。無器用に、信念を貫いた女主人公シルヴィアの生き方を描くことによって、作者は外側からの大きな力に翻弄される小さな個人の、無力にも見える抵抗の尊厳を描こうとしたのである。

2

小説の時代背景・トポロジー・主要登場人物等は、冒頭数章のうちに手際良く紹介される。以下暫くプロットの展開を追ってみよう。

小説の舞台はイギリス北東部の、北海に面した捕鯨基地Monkshaven(モデルはWhitby)に置かれる。ギャスケル夫人自身の水彩画に見られる通りにまだ木造帆船の時代で、水夫たちはここから木造大型帆船に乗組んで霧深い北海を越え、氷のグリーンランドへ、捕鯨のための遠洋航海に出るのだった。危険な航海から船が帰って来る日、港町全体が興奮で沸き立つのは当然だろう。夫や父、息子を乗り組ませている女たちの安堵と歓喜はどのようだろう。

英仏関係が緊張の度を高めている1796年10月初めのまだ暑い日に、村娘のシルヴィアが従姉のモリーと連立って、産みたて卵や新鮮なバターを売りに来た時、港町はちょうど捕鯨船帰港で沸き立っていた。

まだ17才に満たない少女シルヴィアは、たちまち町の興奮に巻き込まれる。そして、貧しい身なりの、明らかに最下層の港湾労働者の娘と見える10才ば

かりの少女が、興奮で蒼白になった頬に涙をこぼしながら「船が砂州を越えたよ！船が砂州を越えたよ！あたし、母ちゃんに知らせなくちゃ！」[4]と喘ぎながら手を差し伸べて来た時、シルヴィアはその手を握ってやったのだった。従兄のPhilip Hepburnが「あの娘は君が手を握ってやるような種類の子じゃあないよ。あいつはこの波止場一帯で“ニューカッスル・ベス”って呼ばれる札付きなんだ」[5]と咎めた時、その言い方に深く傷つきながら彼女は言い返すのである。

"When folk are glad, I can't help being glad too, and I just put out my hand, and she put out hers. To think o'yon ship come in at last! And if yo'd been down seeing all t'folk looking and looking their eyes out, as if they feared they should die afore she came in and brought home the lads they loved, yo'd ha' shaken hands wi' that lass too, and no great harm done.[6]

(みんなが喜んでいたら、私だって喜ばずにはいられないわ。それで私は手を差出した。あの子も手を差出した、それだけよ。あの、遠くの船がやっと入港したのよ！　もし港であの人たちが目を皿のようにして見て、見て、見ている姿を目にしていたら、まるで、船が入って来て、大事な男たちを家に帰してくれる前に、自分たちが死んじゃうんじゃないかって心配しているみたいな様子を見ていたら、あなただってあの娘の手を握ってやった筈よ。それに何の害もないじゃないの。)

シルヴィアの正義感とsympatheticな――ものごとに敏感に感応する――性格は、このエピソードによって明らかである。この資質は次の事件によって一層明白に、従兄フィリップの体制順応的小市民性と対立する。

帰港と再会の歓喜とは全く異質のざわめき――憤怒と抗議の声が群集の中に沸き起る。

Press-gang (海軍強制徴募隊)が姿を現したのだ。ギャスケルは第1章のかなりの部分を割いて18世紀英国海軍が行ったこの強制徴兵制度の悪を告発しているが、拡張期にあった大英帝国は、外国との交戦のために多くの水兵を必要としたのだった。海軍の下士官クラスが中心になって暴力団のような一団が若者狩りをし、拠点にしているパブなどに連行、拘束して海軍の兵役に服させるのである。水兵として役立つ漁村の若者が狙われるのは当然で、航

海から帰港して来た漁師を一網打尽にするのが効率の良い捕え方である。グリーンランド捕鯨漁師は保護されていて、捕獲されない規則なのだが、プレス・ギャングは規則を無視して襲いかかる。しかし、半年近くも氷海で厳しい漁をし、帰宅を目前にした漁師たちの絶望、待ち焦れていた家族の悲憤はどのようだろう。少女たちは怒る。

"They're taking'em to t'Randyvowse," said Molly. "Eh! I wish I'd King George here just to tell him my mind."

The girl clenched her hands, and set her teeth.

"It's terrible hard!" said Hester; "there's mothers, and wives, looking out for 'em, as if they were stars dropt out o' t' lift."

"But can we do nothing for 'em?" cried Sylvia. "Let us go into t' thick of it and do a bit of help; I can't stand quiet and see 't!" Half crying, she pushed forwards to the door; but Philip held her back.

"Sylvie! you must not. Don't be silly; it's the law, and no one can do aught against it —— least of all women and lasses."[7]

(「奴等はみんなをランデヴー酒場に連行して行くんだ」モリーは言った。「ちぇ！王様がここにいたら、言いたいこと全部、ぶちまけてやるのに。」少女は拳を握りしめて歯噛みした。

「ひどいわ！」ヘスターが言う。「母親たち、妻たちが、あの人たちを、天から落ちて来た星みたいに、捜し求めているっていうのに」

「でも私たち、あの人たちのために何も出来ないの？」シルヴィアが叫んだ。「人混みの中に出て行って、ちょっと助けて上げましょう。私、じっと立って見てなんか、いられないわ！」泣出しそうになって、彼女はドアにむかって駈け出した。しかしフィリップが彼女を引き戻した。

「シルヴィ。いけない。馬鹿なことをするんじゃない。法律なんだよ。誰も逆らうことなんか出来ない——少なくとも女子供に何が出来る？」

シルヴィアが他人の苦しみに共感し、人道的正義感に溢れ、しかも行動的であるのに対して、フィリップには現行の体制や慣習を正義とし、それを遵守しようとする態度が顕著である。シルヴィアとフィリップは全く性格の違う従兄妹同志で、シルヴィアはフィリップを避けようとするのだが、フィリップはシルヴィアを愛し、彼女に近付こうと腐心するのである。この日、すで

に二人の間には小競合いがあったのだった。

シルヴィアはコートにする生地を自分で選んで買うことを許されて、町に来たのだった。灰色か赤か好きな方を、というのが母の指示で、シルヴィアはこの日どちらにしようかと迷い続けていたのだった。母が灰色を望んでいる様子は分かっていた。しかしもうすぐ17才になろうという潑剌とした少女シルヴィアは真紅の布地に心が動いていた。

布地を買いにFosterの店に入ったシルヴィアは、そこで店員をしているフィリップに付纏われる。彼は「控え目で、無難で、長持ちする」[8]という理由で灰色を強く奨め、シルヴィアは真紅を選ぶ。彼女は現在の自分が求めるものに忠実であろうとしたのだった。この時彼女はすでにモリーから彼女の従兄Charles Kinraidの魅力的なこと、Specksioneer (一等銛師) としての腕の確かさなどについて聞かされており、まだ見ぬ人への憧れが意識の底で動いていたのである。

衣服に関するエピソードは*Jane Eyre*の、ジェーンを妻に、と決めたロチェスターが、彼女を紫やピンクの服で飾りたてようとしてジェーンに強く拒まれるエピソードを思い出させる[9]。ジェーンも、自分はジェーン・エアであって、ロチェスターの人形ではない、と主張する。ロチェスターには、ジェーンの固く閉じた官能を開かせようという下心が窺われるのに対して、フィリップにはシルヴィアの情熱を押え、“控え目”の中に押込もうと努める守旧性が明白である。

フィリップはシルヴィアの母方の従兄で、母と同じコーンウォールの出身、世間的評価としては真面目で勤勉な、即ちごく平均的で無難な、面白味のない人物である。背は高く、すこし猫背で、顔は長く、ちょっと鉤鼻で、黒い眼。上唇の長い線が不愉快なのだが、それさえなければハンサムと言える顔立ちである。シルヴィアが彼を嫌うのは、彼が独自の信念を持たず、万事世間並みにしていれば間違いない、という小市民性の持主だからであり、またその価値観を正しいと信じて押しつける過干渉のためである。

彼が親しげに彼女をSylvieと呼ぶことにも彼女は反発する。

私はシルヴィアよ、気安くシルヴィなんて呼ばないで、とシルヴィアは自己が自己であることを主張しようとするのである[10]。

もう一つ、作者ギャスケルはシルヴィアの口を通して、フィリップの卑少さを指摘している。即ち彼は自分が勤めている店のちょっとした物——リボンやレースや小物類——をこっそり持出して適当に処分したり、プレゼントに使ったりしているのだった。それは悪とか犯罪とか呼ぶほどの事柄ではな

いかもしれない。誰でもがしていることなのだ。しかし卑しい行為であることに間違いない。助力しそびれる、告白しそびれる、誤魔化す、くすねる、という小さな悪、あるいは性格上の欠点は、やがてシルヴィアを、そして彼自身を悲劇に追込む要因なのである。

シルヴィアの父Daniel Robsonは元一等銛師であったが、今は農場を経営している。海岸の岩のようにどっしりと暖みのある父を、シルヴィアは心から愛し、信頼していた。父親は、「法律とは人が他人に損害を与えないようにするために在るのだ。プレス・ギャングや沿岸警備隊は、わしの商売の邪魔をする…プレス・ギャングや沿岸警備隊を止めさせるべきなんだ」[11]という。

赤い布地を裁ちに来た仕立屋が今回のプレス・ギャングが捕鯨船を襲ったこと、一等銛師のキンレイドが先頭に立って勇敢に戦い、重傷を負ったこと、一人の死者、重傷のキンレイド、老齢の船長以外はすべて強制徴募されたことを話してくれた時、シルヴィアの心はまだ見ぬ人への思いでいっぱいだった。キンレイドはシルヴィアの正義感と行動性——彼女の本質——を体現した英雄だったのである。

そしてある日、父がキンレイドを家に連れて来た。フィリップに対しては舌鋒鋭いシルヴィアがこの後キンレイドに対しては、物も言えずに俯いたり、真赤になったり、泣出したり、手に持っているものを取落したり、全く別人のようになってしまう。初心な処女性を外側から叙述する際の、ヴィクトリア朝の常套的表現法である。しかし表面に現われぬエロスのマグマは彼女の中に動き始めていた。キンレイドから南氷洋での捕鯨冒険談を聞かされたその夜、シルヴィアは夢をみる。

> All night long Sylvia dreamed of burning volcanoes springing out of icy southern seas. But, as in the specksioneer's tale the flames were peopled with demons, there was no human interest for her in the wondrous scene in which she was no actor, only a spectator.[12]

(一晩中シルヴィアは氷の南氷洋に噴き上がる海底火山の焔の夢を見ていた。けれど、あの銛師が語ったとおり、火焔は悪魔の棲みかなのだから、彼女自身に活躍のチャンスがなくて、ただの見物人にすぎない以上、折角のこの不思議な光景にも、人間として全く興味は持てなかった。)

氷海に噴出する真赤なマグマという、現代のシンボルハンターたちが飛びつかずにはいられない心象風景を、シルヴィアも、作家ギャスケルも、有効

には使っていない。
しかし序々に、ごく優しく、二人の愛は育って行く。
チャールズ・キンレイドは丸顔で表情豊か、黒い瞳が冴え冴えとして、深く貫くように相手を見るのだった。黒髪はカールというより捲毛に近く、日に焼けたブロンズの肌、白い歯を見せてにっこり、親しげに微笑む青年である。
父親がキンレドびいきであるのに対して母親は実家の甥フィリップとシルヴィアが結婚することを望む。安定を求めるおとなの智恵である。
会えば泣くようになったシルヴィアを“母親のように”なだめてキンレイドが求婚したのは、出航を明日に控えた夜だった。婚約は父に認められ、二人は六ペンス貨を半分に割って婚約の印に取換わす。但し婚約発表は今度の航海から帰ってから、と定められた。

> ...and this year, ever sin' I saw yo'i' the kitchen corner, sitting crouching behind my uncle, I as good as swore I'd have yo' for wife, or never wed at all. And it was not long ere yo' knowed it. for all yo' were so coy, and now yo' have the face——no, yo' have not the face——come, my darling, what is it?" for she was crying; and on his turning her wet, blushing face towards him, the better to look at it, she suddenly hid it in his breast. He lulled and soothed her in his arms, as if she had been a weeping child and he her mother; and then they sat down on the settle together,……[13]

(「…そして今年、君が台所の隅っこで、叔父さんの後に座っているのを見て以来、君をぼくの妻にしよう、そうでなかったら一生結婚なんかしないぞ、と誓ったも同然なんだ。君だってそのことはすぐ分っただろう、だって、君はとっても恥ずかしがりやだけれど、でも今の君の顔は輝いていて……おや、輝いてなんかいないね、あれあれ、どうしたの？」というのは彼女は泣いていたのだった。そして彼がもっとよく見ようとして、彼女の、涙に濡れ、赤らんだ顔を彼の方に向けさせた時、彼女は突然顔を彼の胸に埋めた。彼は腕の中で彼女をなだめたりあやしたりした。まるで彼女が泣いている子供で、彼がその母親であるかのように。それから二人は並んで長椅子に座った。)
情熱的な愛の場面で、若い男性が、“母親のように”なり、若い娘が“赤ちゃん”になってしまうというのは、“性”に直面したがらないヴィクトリアニズムなのだろう。しかし無垢な娘は男性の前に手も足も出なくなってしまうも

のだ、という認識は危険である。性的存在としての女性の無力さはジェンダーとしての女性の無力さにつながる。女性は、政治・社会・経済においても無力な“赤ちゃん”に甘んじさせられる。さらに例の「女性には性衝動がないものだ」という誤った認識につながるのである。

満ちて来るものを豊かに持ちながら、シルヴィアには表現の手段がない。この後読者が見るものは、有効な発言をせず、有効な行動を取らぬ、不思議なまでに無力なヒロインの姿である。キンレイドという対象を失った時、シルヴィアの感情は流れを止める。父が逮捕された時、彼女はどう対応してよいのか分らなくなる。

3

シルヴィアを襲った最大の悲劇は、婚約の翌朝、キンレイドがプレス・ギャングに捕えられたこと、それにその事実が彼女に知らされなかったことである。彼が溺死した、と彼女は思ったのだった。

目撃者がなかったわけではない。フィリップが商用のためにロンドン行きの船に乗ろうと、波止場近くに来ていたのである。フィリップはキンレイド捕縛の一部始終を見ていた。彼は見る人であって行動の人ではない。キンレイドを助けようとはせず、このことをシルヴィアに語ろうともしなかった。ましてキンレイドの必死の依頼——自分はプレスギャングに捕えられたけれど、必ず帰還して結婚するから心変りしないで待っていてくれ、という伝言——をシルヴィアに伝える気は全くなかった。恋敵の役に立つようなことはしたくなかったし、些細な狡猾さを示す癖は以前からあった。その上、キンレイドが浮気者だという噂も耳にしていた。彼は嘆き悲しむシルヴィアから事実を隠しながら、自分を「何か為にならない事柄を、嘆き悲しむ子の愚かな願いから隠しておく母親」[14]のように感じるのである。

父ダニエル・ロブソンは、直感的にプレス・ギャングの仕業らしいと察したのだが、口に出さなかった。無事に帰って来るかどうか分らぬ男のことは忘れさせよう、という親心である。

このように過保護な男達の判断のために、シルヴィアは選択を誤る。燃え上ろうとした情熱は埋み火となり、判断力は眠らされたまま、彼女は泣いている無力な赤ん坊の状態に置かれるのである。

シルヴィアに起った第二の悲劇は、父ダニエルがプレス・ギャングの拠点焼打ち事件の首謀者として逮捕・投獄され、絞首刑になったことである。当局は最初から剛直なダニエルを処刑するつもりで、偽証する証人まで用意し

ていた、シルヴィアと母ベルは全財産を抛って、弁護活動をフィリップに依頼したのだが、何の効果もなかった。『メアリー・バートン』においては少女メアリーは証言台に立って父と恋人を助ける。裁判も公正に行われる。しかし『メアリー・バートン』の場合が個人の、個人に対する犯罪であるのに対して、パブ焼打ち事件は国家に対する反逆であり、集団による騒擾事件であるために最初から当局側の態度は厳しい。正義感に富む少女シルヴィアの胸に、正義って何なのだろう、という疑念が生じる。父は正義のために起ったのに。正義である筈の行動を犯罪と断定された時、シルヴィアの能力はまた一つ流れを止める。彼女の信念は崩れるのではなく、硬直するのである。後に偽証者Simpsonが死に際に懺悔した時も、シルヴィアは頑なだった。

"It's not in me to forgive——I sometimes think it's not in me to forget. I wonder, Philip, if thy feyther had done a kind deed——and a right deed——and a merciful deed——and some one as he'd been good to, even i't' midst of his just anger, had gone and let on about him to th' judge, as was trying to hang him——and had getten him hanged——hanged dead, so that his wife were a widow, and his child fatherless for ivermore——I wonder if thy veins would run milk and water, so that thou could go and make friends, and speak soft wi' him as had caused thy feyther's death?"[15]

(私は許すなんてこと、とても出来ない——時々思うんだけれど、忘れるってことも私の性格にはないのだわ。ねえ、フィリップ、もし誰かのお父さんが親切な行為をして、——それも正しい行為をして——しかも慈悲深い行為をして——それなのにお父さんにずっと親切にして貰っていた人が、怒っても仕方ない状況にあったとはいえ、出かけて行って、まるでお父さんを絞首刑にしたいみたいに判事に告げ口するなんて、そしてお父さんを絞首刑にさせて、吊させて、死なせてしまって、それでその奥さんはやもめになり、子供は永久に父親無しになってしまって——もしそれでも出かけて行って、自分の父親の死の原因になった男と和解して、優しい言葉をかけてやれるって言うんなら——その人には血じゃなくてミルクと水が流れているってことじゃないかしら)。

正義感と情熱というシルヴィアの特徴は、流出を妨げられ、閉ざされて硬直する。彼女はもはや真紅のコートを選ぶシルヴィアではない。父の死刑、それをきっかけに母が呆けたこと、借地だった農園の立退きを迫られるとい

う事情に追いつめられて、彼女はフィリップとの結婚を承諾せざるを得ない。農地の契約書にサインしたのはフィリップであって、読み書きのできないシルヴィアは、自分がフィリップによって結婚に追い込まれている事実に気付かない。「愛はない」という言葉でシルヴィアはフィリップの求婚に答える。

"Cousin Philip," she replied, in the same measured tone in which she had always spoken since she had learned the extent of her father's danger——and the slow stillness of her words was in harmony with the stony look of her face——"thou's a comfort to me, I couldn't bide my life without thee; but I cannot take in the thought o' love, it seems beside me quite ; I can think on nought but them that is quick and them that is dead."[16]

(彼女は父の身に迫った危険の大きさを悟って以来身につけるようになったあの慎重な話ぶりで答えた。緩慢で無感動な言葉に、石のような表情である。「フィリップにいさん。あなたは私を慰さめて下さる。あなたなしで生きてゆくことはできないわ。でも愛なんていうことは考えられないの。愛なんて、完全に私から離れてしまったわ。生きている人たちのことと死んでしまった人たちのことしか、私には考えられないのよ」)

父の死刑を覚悟し、精神不安定な母を気遣うだけで気持が一杯で、愛のことなど考えられない、と明言するシルヴィアと、フィリップは結婚する。

赤ん坊が生まれた時、彼女は「家の中の捕われびと」になった。

But, by-and-by, the time came when she was a prisoner in the house ; a prisoner in her room, lying in bed, with a little baby by her side——her child, Philip's child. His pride, his delight knew no bounds ; this was a new fast tie between them ;[17]

(だが、やがて彼女が家の中の捕われびとになる日が来た。小さな赤ん坊を傍に、産褥に横たわる、部屋の中の捕われびとに。赤ん坊は彼女の子であり、フィリップの子であった。フィリップの誇りと喜びは限りなかった。これこそ二人を繋ぐ新しい堅い絆と思えたのだ。)

絆とはシルヴィアを縛るロープでもある。彼女は自分が決して居たくない場所に縛りつけられている囚人である。店舗兼住宅のフォスター洋品店には、以前からフィリップを想い続けているヘスターが女店員として働いており、その母アリス・ローズも秘かに娘とフィリップが結ばれることを願っている。

この状況に、シルヴィアは気付かない。ただ居心地の悪さは感じられる。息詰るような町の家を出て、シルヴィアはよく幼児を抱いて海辺へ散歩に出た。フィリップは自分の吐いた嘘に脅え、キンレイドの影に脅える。夕食さえ一緒に取らなくなった二人に、破局は必至だった。

そして遂に破局が来た。キンレイドが帰って来たのである。早朝、母のためのハーヴを摘みに実家の農園に戻ったシルヴィアは、朝霧の中で懐かしいキンレイドとの再会を果たす。最初シルヴィアの不実を詰った彼も、それがフイリップの卑怯な嘘のため、と知って

"your marriage is no marriage. You were tricked into it. You are my wife, not his. I am your husband ; we plighted each other our troth. See! here is my half of the sixpence."

He pulled it out from his bosom, tied by a black ribbon round his neck.

"When they stripped me and searched me in th' French prison, I managed to keep this. No lies can break the oath we swore to each other. I can get your pretence of a marriage set aside. Come away. Leave that damned fellow to repent of the trick he played an honest sailor ; we'll be true, whatever has come and gone. Come, Sylvia."[18]

(「君の結婚は結婚なんかじゃない。君は瞞されてそこへ追い込まれたのだ。君は僕の妻だ。彼の、じゃない。僕が君の夫だ。僕たちは互いに約束し合ったんだ。ほら！ここにあの六ペンス貨の、僕の方の半分がある。」

彼はそれを胸元から引き出した。それは黒いリボンに結ばれて、首に巻かれていたのだ。「フランスの牢獄で、彼等が僕を裸にして探した時にも、僕はこれを守り通した。どんな嘘も、僕たちが互いに誓った誓約を破ることは出来ない。僕は君の偽りの結婚なんか無視できるよ。……さあ、僕と一緒に来るんだ。君の結婚は無効にできる。僕たちが新しく結婚し直すんだ。正々堂々、公明正大に、だよ。さあ、行こう。その薄汚い奴は放り捨てて、奴がこの正直な船乗りに対して働いた策略を後悔させておけばいいんだ。過去に何があったにせよ、僕たちはこれから、互いに誠実でいようね。さあ、シルヴィア。」)

キンレイドが情熱をこめて語り、腕をシルヴィアの腰に廻して戸口に連れて行こうとしたまさにその時、赤ん坊が泣いた。シルヴィアはぱっとキンレイドから離れて、言った。

"baby's crying for me. His child——yes, it is his child——I'd forgotten

that——forgotten all. I'll make my vow now, lest I lose mysel' again. I'll never forgive yon man, nor live with him as his wife again.[19]

(「赤ちゃんが私を呼んで泣いている。彼の子供——そうよ、彼の子供なんだわ——私はそのことを忘れていた——すっかり忘れていたのだった。二度と自分を見失わないように、私は今、誓を立てます。私は決してあそこにいるあの男を許すことはないでしょう。また再び妻として彼とともに暮らすこともないでしょう」)

家の中の捕われびとシルヴィアは最も不毛な選択をしたのである。彼女は心の恋人キンレイドに随いてゆくのを断念した。同時にフィリップを捨て、"妻であること"を捨てた。一途で正義感の強い彼女は、恋人キンレイドに、不実な女と誤解されるような生き方をしたのが辛かった。その原因を作為して、自分に道を誤らせたフィリップを許せなかった。先の引用(15)でも明らかなように、彼女は決して忘れたり許したりすることのない、巌のような硬さを持つ女である。キンレイドとの誓を破った自分への罰として、彼女は新しい誓——決してフィリップを許さない——を立て、今度こそそれを最後まで守り通してしまう。

ここで二つの先行文学『嵐が丘』と『ジェーン・エア』について考えてみよう。二作とも一人の女性に二人の男性がかかわる。

『嵐が丘』においても、ヒロインは誤った選択をする。ヒースクリッフを「愛している」「彼の魂と私の魂は同質のものだ」

「彼はいつもいつも私の心の中にある。」[20]

と認識していながら、彼女は結婚という世俗的習慣においては、良家の子息エドガー・リントンを選んでしまう。しかし真の恋人ヒースクリッフは絶望して姿を消すだけで「僕と一緒に行こう」とは言わなかった。"Come, Cathy!"と心からの叫びを上げたのは、キャサリンの死後十余年を経てからその亡霊に対して、である。

『ジェーン・エア』の場合は、ヒロインが誤った結婚を選びかけたまさにその時、真の恋人ロチェスターからの神秘的な呼びかけ"ジェーン、ジェーン!"が夜の高原を貫いて響く。それは廃人になった彼が自分への過信や驕りを捨てて、無心に、一途に彼女を求める真実の叫びなのである。絶望の淵からの呼びかけ(Calling)は、ジェーンにとってはCalling(神のお召し、召命)に近いものであった[21]。呼び声に惹かれるままにジェーンは真の恋人ロチェスターを探しあて、見出し、彼を愛し、彼に献身する。義務感が要求するものと、エロスが要求するも

のが一致した、まことに幸福な例である。彼女の使命感にのみ呼びかけたセント・ジョン・リヴァーズはジェーンの分身とも言えるだろう。彼はエロスの呼び声には耳を傾けず、聖なるものの呼び声に従って殉教者のような死に至る。

シルヴィアの場合には、愛の呼び声と義務の呼び声が分裂する。真の恋人キンレイドを再び見出し、まさに呼び声に従おうとした時に、切実な声をあげて彼女を呼んだのは、夫フィリップではなかった。彼女を呼び求めたのは赤ん坊のBellaである。幼い娘の泣声に足を竦ませてしまったシルヴィアは、以後母であれ、という義務と献身の呼び声のままに、優しく鈍く青白い「母」としてのみ生きることになる。

もし彼女が泣いている赤ん坊を捨てて、キンレイドに従いて家を出ていたら、彼女にも作者ギャスケルにも、別の人生が待っていたに違いない。道徳的なミッド・ヴィクトリアンの読者たちは決してヒロインも、作家も、出版元も、許さなかっただろう。[22]

4

この後ストーリーは奇妙な捩れを見せて——あるいはタイトルの示す本題に入って——キンレイドとフィリップという“恋人たち”の運命を辿ることになる。

赤ん坊に優る切実な叫びをあげなかったキンレイドは、結局失恋の痛手を忘れたのだろう。海の男としての能力を十分に発揮して海軍大佐に昇進し、裕福な良家の美女と結婚する。その女性はキンレイドの帰還を信じて待ったのだと、シルヴィアは聞かされる。

フィリップもシルヴィアを求めて叫びはしなかった。家を出「自分も目の前の海軍士官のように陽気で、機敏で、良い服装をして、海軍の栄光を身につけてモンクスヘイヴンに帰ったら、シルヴィアはもう一度自分を愛してくれるのではないか？」[23]という安易な理由から海軍に入隊した彼は、僚友の不注意によって起きた銃の暴発事故で顔の下半分を失うという重傷を受け、体力も気力も萎え果てる。傷兵として除隊になった彼の行く先は故郷しかない。しかし彼は無残な姿を妻に見せる勇気がなかった。彼は名を隠し、村はずれの粗末な小屋に衰弱した身を横たえて、たまに町に出ては妻子のありさまを覗う。彼の行動は、帰郷の途中で読んだ中世の騎士Guy of Warwickの物語をなぞっている。

ガイはさまざまの戦功を樹てて伯爵の娘フェリスと結婚した。その後聖地

に戻って苦しい戦をした時、彼は「もう一度イングランドに帰らせて下さい、帰らせてさえ下されば、再び妻には会いますまい」と誓ったのだった。
イングランドに戻った彼は隠者となって、日々のパンをそれとは知らぬ妻の手から施されていた。死に際に指環を彼女に送ったために身分が分ったのだ、という。少々嗜虐的かと感じられる彼の行動も、神に誓ったということで一応説明はつく。

『シルヴィアの恋人たち』の翌年に出版されたテニスンの*Enoch Arden*[24]も類似した内容の長詩であるが、遠洋漁業に出、難破したイーノックが5年後にやっと家にかえってみると、妻は彼の旧友フィリップ・レイと再婚して、赤ん坊も生まれていた。彼らの幸福を守るために、イーノックは村はずれの小屋にひとりで暮し、死ぬまで、自分の存在を妻に知らせなかった。新しい家族の平安を守るために、イーノックは自分を抑えたのである。

『シルヴィア』のフィリップは、妻に会わない、と神に誓をたてた訳ではない。シルヴィアも再婚している訳ではない。自分の財産である洋品店を、友人のクールソンが支配していることに穏やかでない気持を感じたりもするのだが、しかし彼は自分の敗残の状況を恥じて、名乗り出ようとはしない。自分の身分を隠して、ひそかに妻子の姿を盗み見て、心を慰さめている。もっともらしい理由がないことがかえって、フィリップの選択に真実味を与える。普通の人間は自分の醜さを、愛する人に見られる勇気がないだろう。自分をこれ以上窮地に追いこむのは止めて、隠れて、安全に、相手を眺めることを選ぶのだろう。ちなみに第一次大戦後のアメリカを舞台にしたS.フィッツジェラルドの『偉大なギャツビー』において、主人公のギャツビーは、すでに結婚して子供まであるディジーに、五年前に戻ろう、と呼びかけ続け、ついに命を失う。彼が "great" であるゆえんである。

かつて近付いてもいけない、と人に警告していた貧民窟でひっそり暮らしていたフィリップは、ある日、偶然、海に落ちた吾が子ベラを助け、自分は岩に叩きつけられて瀕死の重態に陥る。フィリップの正体も、そこで明らかになった。

しかし、夫であり、娘の命の恩人でもある人に対するシルヴィアの態度は意外なまでに冷めたい。彼女はまず娘に会わせてほしい、フィリップはその後で、と言う。小屋の前に来ても、いきなり飛び込みはせず、医者が出て来てから、と、村人の敵意に満ちた視線を浴びて立ちつくす。沈黙を破るのはフィリップだった。醜く変形した顔をそむけて、彼は

"Little lassie, forgive me now! I cannot live to see the morn!"[25]

と許しを請い、死期の近いことを告げる。しかしシルヴィアは深い溜息をつき、頬を彼の手に寄せるけれど、「許す」という言葉は言わない。再び口を開いた彼は自分が彼女に残酷な所業をしたこと、神はそれを許し給うだろう。お前も許してくれ」と告げるが、返事として聞こえてくるのは磯を洗う波の音だけである。三度び彼が口を開いて自分の誤を認め

"……But speak one word of love to me——one little word, that I may know I have thy pardon."[26]

(ただ愛のひとことを語ってくれ、——短いたったひとこと、それでお前の許しを得た。、と分るように)

と乞うた時、彼女が呻くように語ったのは自責の言葉である。

"Them were wicked, wicked words, as I said, and a wicked vow as I vowed, and Lord God Almighty has ta'en me at my word, I'm sorely punished, Philip; I am indeed."[27]

(わたしが言ったのは悪い、ほんとに悪い言葉だった。わたしが誓ったのも悪い誓だった。そして全能の神はわたしの言葉をそのまま行い給うた。わたしは厳しく罰せられました。フィリップ、ほんとうにひどく。)

自分が悪かった、と詫び、自責するのと、あなたを許す、あなたを愛す、というのとは明らかに違う。シルヴィアはわっと泣き伏したり、自分がどんなにフィリップに対してひどい態度を取ったかを悔んだりするけれど、フィリップが待ち望む"短いたったひとこと"I love youを絶対に口にしないのである。引用 (19) でたてた誓い「私は決してあそこにいるあの男を許すことはないでしょう」を彼女は固く守る。引用 (15) の "It's not in me to forgive …not in me to forget." もここで思い出すべき響きである。シルヴィアは父ダニエル・ロブソンの剛直さを受け継ぎ、岩のように動かず、変らぬ性格の持主なのである。田舎娘らしく、重く生真面目な彼女は、状況に応じて変化する器用さを持たない。恋心を表出するのに不器用であった彼女は、いまフィリップに対して抱く万感の思いを表出するにも不器用で「神様はわたしを許して下さるかしら。あなたをあなたの家から追出すような仕打ちをして……あの飢饉の時、あなたはお腹が空いていたに違いないのに……」[28]と自責の言葉を述べ、これから人々が白眼視する中を耐えて生きねばならぬ辛さを訴えて、逆にフィリップから慰められる有様である。

シルヴィアにI love youを言わせずに、フィリップと読者を満足させるために、作者ギャスケルは絶妙の力業を演じる。視点をフィリップに置いたのである。薄れゆく意識の中で、彼は愛する妻シルヴィアが自分の手をしっかり

握ってくれるのを、啜り泣きながら身体をしっかり抱きしめてくれるのを感じる。

読者が読むシルヴィアの訣れの言葉は

"Oh, wicked me! forgive me——me——Philip!"[29]

であるけれど、フィリップは、自分の唇に気付薬を塗ってくれるのがシルヴィアであることを感じ、耳に愛の言葉を囁くのがシルヴィアであると分るのである。彼は惨めな妻を慰めようと、最後の力を振りしぼって

「天国で会おうね！」[30]と言い、息絶える。

シルヴィアが意識的に"許す"という言葉を避けた事は、彼女のヘスターに対する自責に満ちた言葉からも分かる。

「なぜ泣くの、ヘスター？あなたは生きている限りあの男を許さないでしょう、なんて言わなかったじゃありませんか。あなたは自分を愛してくれる人の心を砕きはしなかったし、自分の家のすぐ外でその人を飢えさせたりもしなかったじゃありませんか？」[31]

ヘスターは幼女ベラを連れて、すでにフィリップが息絶えた後、部屋に入って来たのである。

幼い娘ベラはフィリップを見て

「お腹が空いていた可哀想なおじちゃん。おじちゃんはもうお腹が空いていないの？」[32]

と尋ねる。彼女にはフィリップに命を助けられた、という認識がなくて、その数日前の出来事だけを覚えているのである。それは、フィリップがとぼとぼと小道を歩いているのを見た時、シルヴィアが追い抜きざまに半クラウン貨を入れたケーキの箱をベラの手から男の手に渡してやった。という事件である。彼女にとってフィリップは"父"ではなく、"お腹の空いたおじちゃん"でしかない。

情況がかなり異なるものの、ホーソーンの『緋文字』(1850) において、アーサー・ディムズデイルが死を前にして告解をし、赦しを乞うた時、幼い娘パールが彼の唇にキスして赦しと和解の行為を印象的に果たすのとあまりにも違う。『緋文字』における幼女パールが母ヘスター・プリンと父アーサー・ディムズデイルの愛と不倫の罪と苦悩の象徴であり、最後に和解と赦しの象徴として大きな役割を果たすのに対して、『シルヴィア』の幼女ベラは父をそれと認識しない。離ればなれに暮した父と母と娘は最終場面でも融合せず、同じ小屋の中に集っても、心は離ればなれのままである。

認知と和解のもう一つの象徴——ゴシック物語によく用いられる認知のた

めの小さな護符――も、その機能を発揮しない。

作者ギャスケルが、そして主人公フィリップが下敷にした*Guy of Warwick*の物語においては、隠者が死に際して妻に送った指環が護符の役割を果たす。指環は妻によって認知され、妻は彼が夫であることを認め、彼の苦悩――自分自身をそれと明かせぬ苦しみが妻に理解される。

『イーノック・アーデン』においても、「死んでから渡すように」と彼がことづけた嬰児の髪が、"父"としてのイーノックの正当性を主張するとともに、再婚した妻の平安を乱すまいとした彼の、愛と自己犠牲の切なさと雄々しさを強調するのに役立つ。

しかし『シルヴィア』においては、フィリップが黒リボンで結んで首に下げた半クラウン貨は、認知と和解の護符としての役割を果たさない。

フィリップの死の直後、ヘスターがベラを抱いて部屋に入り、額に訣れのキスをして、半クラウン貨を見付けるのである。その硬貨はシルヴィアがケーキに入れて、娘ベラの手から「かわいそうなお腹の空いたおじちゃん」に与えたものであって、シルヴィアの側からは慈善の象徴ではあるが、愛の象徴ではない。フィリップにとっては愛の象徴であったその護符を、妻シルヴィアは彼の生前も死後も、見付けることができなかった。

黒いリボンに結んだ半クラウン貨は、かつてシルヴィアとキンレイドの間に取交わされた六ペンス貨を思い出させる。愛のしるしとして二人はその硬貨を半分に割り、キンレイドはそれを黒リボンで結んだ首にかけ、肌身離さず持っていたのだった。キンレイドのように愛されたかったフィリップ、学習し、模倣するフィリップは、妻にも娘にも愛と認知を受けぬまま、自作自演で天国の門まで辿りつく。

5

妻・娘・護符、そのどれによっても認知と和解が与えられぬ時、どんな読者も、これが和解と認知の物語でないことを理解するだろう。愛を奪われ、石になってしまった女性は、以後どのような献身や自己犠牲を受けても、生身の人間に立戻ることはできないのである。

世間の批判は当然のようにシルヴィアに集中し、「自分は夫の資産でぬくぬくと暮らしながら、夫を貧困と飢えの中に、しかもつい目と鼻の先に放置しておいた冷酷な妻」[33]の物語として総括されるに至る。シルヴィアは自己の正しさを説明できない。というよりはむしろ説明する努力を放棄して、すなわ

ち人生に対して門を閉ざして、若死にしてしまう。

「もし私がとても長生きをして、その間ずっと善良であろうと努力し続けたら、神様は私を、フィリップがいる所に入らせて下さるでしょうか」[34]という可能性を彼女自身で放棄するのである。

真赤なコートを着たかった少女は、ついに人生の手によって黒衣を着せられる。感受性・正義感・行動力・実務能力を持った、赤い薔薇のような少女が、出口をことごとく塞がれて、能力を発揮できぬままに化石のようになってしまう物語は、ギャスケル自身が "the saddest story I ever wrote"[35]と述べたように、悲しい物語である。われわれは無心な個人の上に加えられた外部の力の暴戻を悲しむ。

外部の力とは強制徴兵制度や不公正な裁判に象徴される国家権力であり、固陋な人々が作り出す雰囲気であり、安定をのみ願う意識の壁である。それは社会の中にあり、読者の中にあり、シルヴィア自身の内部にも在って、彼女自身の行動を縛ったのである。ヴィクトリア朝中期の作家として、ギャスケルは普通の人びとを縛る "良識" の束縛の悪を実感し、糾弾した。シルヴィアの娘ベラを新興国アメリカに落着かせたのも、イギリスにはない自由を与えようとした結果であろう。

逆にアメリカ文学においては、アメリカ社会の狭量を嫌って、自由を求めてヨーロッパへ旅立つヒロインの姿も多いのではあるが。

権力から遠ざけられ、社会改変の力を持たぬ女性たちは、とりあえず、逃げる。"心願の国" を自己の内面に——狂気や死に——求めた女性がいる。絶望的に立上がる女性もいる。

シルヴィアは現実と和解することを避け、現実から旅立った。その娘ベラが善意の人の財産を受継ぎ、新しい国アメリカへ旅立ったのは、その母の悲しい旅立ちの代償とも言えよう。『シルヴィアの恋人たち』は強大な外部の力に翻弄される弱い個人たちの物語である。

同時に、表面石のように硬く、蒼ざめた女性の内部にも、このように長い、人には言えぬ物語が秘められているのだという、深い人間洞察を示す物語とも理解できるのである。

(本稿は1993年6月12日、第5回日本ギャスケル協会例会において行った講演に加筆したものである。)

注

(1) 1993年6月12日の日本ギャスケル協会例会の席上でも小池滋氏より同様の示唆があった。

もちろん、属格であり対格でもあるのが真の恋人同志である。イギリスでは“情夫”というニュアンスが強いが、今日アメリカにおいては性別を問わぬ恋人を示す便利な言葉として復活し、用いられ始めている。

(2) *Elizabeth Gaskell, Sylvia's Lovers,* Knutsford Edition (London : Smith, Elder, & Co, 1906), p.345.

但しAMS Pressによる復刻版 *The Works of Mrs. Gaskell* (New York: AMS Press, 1972) Ⅵを使用、以下引用は同書による。*Sylvia*あるいは『シルヴィア』と略。訳はすべて拙訳。

(3) Ibid., p.346.

(4) (5) (6) Ibid., p.29.

(7) Ibid., p.30.

(8) Ibid., P28.

(9) Cf. Charlotte Brontë, *Jane Eyre, Life and Works of The Sisters Brontë* (New York : AMS Press, 1973) Ⅰ, p.314, pp.326～327.

(10) Cf. *Sylvia,* p.27.

(11) Ibid., p.46.

(12) Ibid., p.112.

(13) Ibid., p.207.

(14) Ibid., p.249.

(15) Ibid., p.352.

(16) Ibid., p.320.

(17) Ibid., p.370.

(18) Ibid., pp.403～404.

(19) Ibid., p.404.

(20) Emily Brontë, *The Wuthering Heights, The Life and Works of The Sisters Brontë* (New York : AMS Press, 1973)V, pp.82～84.

(21) Cf.Charlotte Brontë, Op. Cit., pp.512～513.

なおこれに先立つSt. John Riversからの呼びかけ “Jane, come with me to India.” をa Summons from Heavenかと聞くが、ジェーンの結論は “——I could not receive his call.” (p.491)である。

(22) Kate Chopin (米、1850－1904)の *The Awakening* (1899)が好例である。

この作品において女主人公エドナ・ポンテリエールは「子供のために自分を犠牲にすることはできない」と語り、批評家の猛攻撃を浴び、作者も作家生命を断たれた。

(23) *Sylvia,* p. 413.

(24) Cf. Alfred Tennyson "Enoch Arden" *Tennyson, Representative Poems* S.C.Chew ed., (New York, The Odessey Press, 1941), pp.251-276.
「イーノック・アーデン」は1862年夏に書かれ、出版は1864年。非常な人気を博し、初版6万部が売れたという。彫刻家Thomas Woolnerの話にヒントを得たもので、類似の民話・文学は多いが、テニスンはそれらを用いてはいないとされる。状況も、妻アニーの、もしかして夫は生きているのではないかという期待、第2の男性のフィリップという名までも『シルヴィア』との類似点は多い。ただ詩と小説の相違もあり、『イーノック・アーデン』には『シルヴィア』のような捩れはない。
直線的にイーノックの男らしさ、雄々しさを讃える内容になっている。イーノックの持つ護符は出航の時に身に付けて出た嬰児の髪であって、孤独に生きる彼の支えとなり、死に際しての身分証明ともなった。

(25) (26) (27) *Sylvia,* p.523.

(28) Ibid., p.524.

(29) (30) Ibid., p.528.

(31) (32) Ibid., p.529.

(33) Ibid., p.530.

(34) Ibid., p.529.

(35) Ibid., Introduction by A.W.Ward, p. X iii.